

## 社会学部卒業論文

### 「アルコール依存症からの回復にむけての一考察」

#### - セルフヘルプグループの原則と事例を通して -

04SW1044 加藤良典

「分かつちやるけどやめられねえ」

この言葉は、1960年代の高度経済成長の時代に、大ヒットした「スーダラ節」の歌詞のひとつである。歌詞にある「分かつちやるけどやめられねえ」とは、自分の意志では止められない、頭では分かっているのだが自分の行動を変えられない状態が描かれている。「分かつちやるけどやめられねえ」とは、まさにアルコール依存症という悪夢の本質を言い当てている。

現在わが国には、約230万人の人がアルコール依存症を患っているといわれている。230万人もの人が、酒を「分かつちやるけどやめられねえ」状態になり、その結果、酒に対する強い渴望感、飲酒のコントロール不能等の様々な症状に陥っているのだ。アルコール依存症は、その症状を通じて、日常生活の破綻、人間関係の崩壊、職場や地域社会との軋轢等の社会生活面での苦痛を、人々に押し付けている。そしてこの苦痛は、依存症者だけに降りかかるのではなく、家族や友人といった依存症の当事者に近い関係にある人々にも、様々な局面で陥らせている。

これらの現実、決して個人に降りかかった大きな不幸ではない。現代社会が抱えている社会問題の1つなのである。しかし、自己責任という現代社会のイデオロギーの下では、いまだにアルコール依存症は個人の問題とみなされてしまう。その理由として、アルコール依存症になった人への根強い偏見、アルコール依存症についての誤解が社会に広がっていることが挙げられる。それだけアルコール依存症は、未知の問題であったのだ。

時を経るにつれ医学や看護の世界では、この未知の問題は飲酒者のすぐ近くに潜み、飲酒者をいつでも陥れるという認識がなされてきた。それにより、アルコール依存症の原因やそれがもたらす苦痛について細かく分析がなされた。また、アルコール依存症の症状やアルコール依存症そのものについての具体的な治療法についての模索が行われた。アルコール依存症の原因因子については、ある程度の答えを導き出せたのだが、有効な治療法とアプローチについては開発出来ていない。医学や看護だけでは、この病を治すことに限界があるのだ。この事実は、アルコール依存症が不治の病であることを重く示している。当事者にとっては、あまりにも厳しい宣告である。

アルコールを治療する方法がないのだとしたら、当事者に待ち受けているのは、絶望の未来とだけなのだろうか。当事者と彼/彼女と近い関係にある人は、一生苦痛に縛られなければならないのだろうか。これに対する当事者たちの思いは、NOである。誰が、自分の人生に希望がすべて失われることを喜んで受け入れるだろうか。当事者達が本当に受け入

れるべき事実は、アルコール依存症からの回復を願える希望と回復のために必要なプロセス、行為である。それを信頼して、自分の歩みを起こしていくことが、最も大切になってくるのである。

そこで本論文では、アルコール依存症による絶望の未来ではなく、病と苦痛からの回復の未来を実現するために必要な取り組みについての考察を、様々な見識を基にして深めて行きたいと思う。回復というタームには、様々な意味合いが含まれているが、本論文中では以下のような意味を持つ言葉として記述していく。

「回復とは、今現在の自分の状況があるがままに見つめていき、自尊心、生活様式、人生を、周りの支援を得ながら新しくしていく営みである。そのために、外からの圧力を受けても、心の弾力性をもって圧力を上手く跳ね返していくこと、自分の持つ力をどのような形で自分に活かしていくかを考えること、それらの行為を少しずつ自分のものとしていく営みでもある。」

本論では、まず第一章でアルコール依存症からの回復のために必要なプロセスを学ぶ場について取り上げた。具体的には、苦しみを抱えた当事者達が、自分たちの生をありのままに分かち合い、悲しみ合い、そして今までの苦しみを解き放てる場としてのセルフヘルプグループ (Self Help Group:SHG) に着目し、その基本的な機能と具体的な内容を概観した。そして、SHG の構造と働きを解明するために、筆者は岡知史による SHG の概念、橋本美枝子による「人と環境との相互作用」の論理を参考とした。

第二章では、筆者が更生施設での 1 ヶ月間の実習の中で、面接をさせていただいた 4 人のアルコール依存症者の話を通して、SHG が彼らの回復にどのような支えになっているのかを検討した。また、アルコール依存症の当事者の生活と断酒活動との兼ね合いや、当事者の SHG に対して抱えている思いについて触れた。

第三章では、SHG と回復のプロセスの起源、歴史、原則、実践を言及していき、回復というものが、人に気付かせた驚くべき恵みと力を述べた。中心的なテーマとして、「信頼をもって歩む姿勢」は、どのような原則 (ex .AA の 12 のステップ) と実践を通して、アルコール依存症者に導かれているのかを考察した。

終章では、これまでの章の考察を踏まえて、これからの回復にむけて期待されていることと今後の課題について述べ、結びとした。